

最近のインドシナ

対 談

東京外 国語 大学助教
中 嶋 嶺 雄

毎日新聞外報部次長
吉 沢 孝 治

吉 沢 孝 治

吉沢 十五日から二十一日まで、サイゴンで行なわれていました南ベトナムと北ベトナムの統一に関する会議が終わり二十二日に共同コミュニケが発表されました。それで南北ベトナムが来年の前半には総選挙を行なって統一政権をつくるということになったわけなんです、これはことしの四月三十日にサイゴンが人民解放軍の手で解放されて以来、確実にくると思われた路線なので、あまりそれ自体驚くには当たらないことなんです、その解放後の、南ベトナムが西側記者がなかなか入りにくい、情報が取りにくいことになってしまったので、何が行なわれているか、さらにその背後の国際関係でどうい問題があるかをきょうはお話ししていきたいと思っんです。

まず、この南北ベトナムの統一が予想外に早く行なわれた。おそらく来年の四月三十日、解放の一周年のころには選挙が行なわれて、選挙で選ばれた議員によって憲法、さらには新しい政権、政府が構成されるということになるんでしょ、これについての中嶋さんの評価はいかがでございますか。

中嶋 そうですね、ご指摘のように、いずれこういう事態になることは予想されたんですが、意外に早くきたという感想を持つわけです。と申しますのは、この春の解放以来、北側の指導下に、ハノイ化を進めてきたわけですが、南の中にはそれに対する違和感とか、民衆の間にもかなり潜在的な抵抗みたいなものが見られたり、その点でハノイ化がそう早く進まないのではないかとというような見方もありましたし、それだけに今回、ここまで事態が進んだことは、テンポが急に速くなったという気もしないでもないですね。

吉沢 この統一会議が、北側の代表団長がチュオン・チンでベトナム労働党のナンバー2の地位にある人である。南側はファン・フンでこの人は労働党の同じく第四位にある人であるということでは、実は北と南との統一会議よりも、もともとベトナム労働党、ハノイの権力中枢が決めていたことを、南側に納得させる上で、サイゴンへ出向いて会議を開いたというような形式も見られるんですがね。

中嶋 ただこの南北統一、総選挙というような問題が来年実現したとしても、これによって南が社会主義革命に一举に到達するというふうにはどうも思えないような気がして、かってからレ・ジュアンなんかも言っているように、北の社会主義革命と、南の民族民主革命をどういふうに整合させていくか。ある意味での二段階革命戦略をとっていましたが、革命の段階ではやはりその戦略が基本にありながら、政治、軍事、それから党という点ではもうすでにいわばハノイ化は進んでおりました。

それからそれを行政レベルにおいて選挙という形を通じてひとつこれを進めようということになったんじゃないかという気がするんです。

吉沢 ベトナムの歴史を見ますと、現在南ベトナムといわれている地域が、ベトナム人のものになった時期は二百年から二百五十年ぐらい前の時期である。それから以後南と北のベトナムが統一政権のもとに統治されたのは、ジアロン帝の統一からフランスの植民地下に入るわずか八十年の間であった。そういう意味では歴史上、南北統一したベトナムというのは長期間存在したことはないわけですね。

もう一つ、南北の違い、南のほうは非常に暑くて水もたっぷりあって、非常に農業的に肥えている。北側はベトナム人の人口を支えるだけの食糧ができないということ、むしろベトナム人は、南ベトナムをカンボジア人とかチャム族から占拠することによって植民地を築いたんだと。そういう意味で南ベトナムの人たちは北から追い出されて南へ来て定植したという、はなから北ベトナムの人たちに対するコンプレックスがあると。その上、そういつたいい気候に恵まれているんで、北の人たちに比べて勤勉さに欠ける。したがって個人主義的な傾向も非常に強いことから、社会主義、中央集権制に対して、基本的に南は反発する傾向がある。それを心のすみから、北主導型の統一ベトナムにもつていくことは、非常に政治的、軍事的な統一以上にむずかしい問題だと思っんですがね。

中嶋 サイゴン陥落以降、なかなか生の情報が入りませんが西側の記者なんか全般に伝えていることは、やはりいわゆる解放であるよりは革命であったんだという点の驚きですね。そういう点で急激にハノイ化が進んできている。それからいわば民族統一戦線であったにもかかわらず、広範な民族統一戦線に参加した人たちが次々に排除されたというよう

な問題があり、かなり従来のアメリカ帝國主義反対、民族解放闘争チュー政権打倒という状況の中で、いわば民族解放という点にかけていた人たちの失望落胆みたいなものもかなりあったと思いますね。そういうことが背景にあるだけに、今回のような状況がスムーズにいくと見るのは困難じゃないかという気がするんですが、ご指摘のとおりだろうと思います。

吉沢 その後の情報でも、旧チュー政権時代の軍隊が、数十万人に至るまでまだ武器を提出しないでいる。あるいは通貨改革を行なったんですが、それについてさらにもう一回あるんじゃないかというデマが流れて、人心を非常に動揺させて、買いために走って物価が上がるといったところも今のサイゴン政権は一生懸命、これは反動主義者の陰謀だと言ってるんですが、そういうものに走りがちなのは、南ベトナムにやっぱり当分の間残ると思いますね。

中嶋 そうですね。これは中国革命の過程と、ある意味で比較できると思うんですが、テンポは中国革命以上に速いんですが、基本的な二段階革命の戦略をとっているながら、テンポが速すぎるので、どうしてこんなふうになったのかなという気もしないではないんです。

吉沢 先ほどから、統一のテンポが速い。社会主義化のテンポが速いという話が出たんですが、これと、統一を含んだベトナムを包む情勢、現在アメリカのベ

トナムに対する影響力はますますなくなったわけなので、いちばん大きな問題点は、中国とソ連の問題ですね。その影響力との関連、そういうことでとらえてみると、どういう見解が出てきますでしょうか。

中嶋 そうですね、一般には中ソがインドシナ革命、ないしはインドシナ解放勢力の背景にあったといわれてきたんですが、それは事実としてはそうであるが、とくにバリ協定以降の、ベトナム戦争の最終段階を見ますと、圧倒的にソ連の軍事力が強かったと思いますね。

現にサイゴン解放になったのは北の正規軍であった。その正規軍はソ連の重戦車、装甲車とロケット砲とか、重武装した、すべてソ連の影響下にあったということができるわけで、しかも非常に中ソ対立が今激しいわけですね。わたくしはそういう点からも、やはりソ連の影響力が非常に強くなることはすでに北京も察知しており、非常に意味でやっかいなことだというふうに思っていると思うんです。

そのやっかいさというものは、単に中ソ対立という問題に対するソ連の影響力、ハノイへの影響力という問題はありますが、もう一つ、かつてスターリンが中国革命の勝利に非常に手をやいたように、現在北京にとっては、当然北京としても喜ぶべきことであるにもかかわらず、やはりそこにインドシナ革命とい

う、もう一つ大きなアジアの革命勢力ができてくるということですね。これは中国の伝統的な東アジア世界秩序観からしても、かつてスターリンのソ連が、強大な統一された共産党政権ができることを毛ぎらいしたように、そういう意味でも北京にとつてもたいへんやっかいなことである。

で、これは一部には伝えられておりますが、江青夫人が演説をしたとか、喬冠華外相が幹部演説をしたとか、いう情報もあるわけで、それなどを見ましても、かなりハノイに対しては手をやいていく。つまり現在の中国はひとえに反ソ路線をとっているんですからね。その点で中国の指導者が、反帝だけで反ソをやらないのは革命ではないということも言っているわけですね。これはハノイに当てはめて言っているということが一つあると思うんです。

それからもう一つのインディケーションは、ご承知のように西沙群島（パールアイランド）これは去年の一月、中国と南ベトナムの当時のチュー政権の間で軍事衝突が起こりましたが、それ以来、中国は盛んに西沙群島の記事を取り上げて、「人民日報」「人民中国」等々で、西沙群島の中国側の領域における革命委員会の発展だとか漁民の発展ということを盛んに言っているわけですね。ところが、香港の「ファイ・イスタン・エコノミック・レビュー」なんかも認めている

ように、サイゴン陥落以降、西沙群島のかつての南ベトナム政権のところの地域には、北側の正規軍が派遣されたということがいわれております。これは中国にとつて非常に苦しいことであるに違いない、そんな気がするんですがね。

吉沢 ベトナム戦争が続いている間は、ハノイの政策は、中国とソ連の間をバランスを保ってきたんですが、これが南北ベトナムの全解放が成功してからあと、やはりしだいにその援助額も多いし、民族問題でも直接境を接している、危険の少ないソ連寄りになってきた。

最近の例で言いますと、アンゴラの独立問題にしても、非常にソ連が肩入れをして、中国は分派として毛ぎらいをしている人民運動派の政府をすぐに承認したり、あるいは中国とはまた鋭い対立関係にあるインドのインディラ・ガンジー首相の強権発動に対して称賛の声を上げてる。あるいはレ・ラジュアン・ベトナム労働党の第一書記が北京を訪問したときには、ソ連の言う覇権反対については何も合意を与えないためにコミニケも出なかった。それに対してその後行ったモスクワでは、共同コミニケに調印して、かつて米ソ、あるいは米中のデータンを、盗人が溺れているところに浮輪を投げてやるようなものだと行って非難したハノイが、その米ソのデータンを称賛するコミニケに調印してる。それと同

時に、ソ連からかなりの経済援助をせしめてるといふようなところから、非常にハノイのモスクワ寄り姿勢が出てきたんじゃないかと。

中嶋 わたくしその点でその問題がどうも今回のいわばハノイ化の急速な急テノポの進行にも、ある意味では無関係ではないという気がするんですね。それは、中国は七三年のバリ協定以降の中国のベトナム政策を見ておきますと、どうも本心は、北はやはりソ連のほうだということとを彼らはわかっている。ですから、ホー・チ・ミンはよかったが、そのあとがいけないとか、暗に今ベトナムには托針僧がいて、彼らは物ごいをして何でもらってくるというようなことを言ったり、これは明らかにレ・ジュアン以下、多くのメンバーを指しているわけですね。その中で、どうも中国とベトナムの関係は、むしろ北ベトナム、ベトナム労働党よりはPRG、臨時政府の解放戦線、ないしは臨時政府のほうがどうも関係がいいみたいな、現に序列などをそういうふうには中国はあえて、南の側に優先権を持たすというようなことがあり、中国側の報道のニュアンスからもそんなようなことがうかがえるわけです。

ところが、やはりインドシナ半島全体、とくにベトナムにおけるソ連の影響が、ハノイの指導性はどう揺るぎないものになっており、この点で中国としては非常に焦りがあるし、またハノイの側

してみればむしろこの点で行政的にも一本化を早くしてしまわないと、まかりまちがえば中ソ対立が持ち込まれるという危険ですね。その点でわたくしは従来中国寄りだといわれていたチュオン・チンが、今回の南北統一会議に出てきて、しかもその主役を演じたということは、やっぱりハノイにとっては、ポイント・オブ・ノーリターンといましようか、中ソの点ではもう一つの方向をこれで見せるんだということの表われじゃないかという気がするんですね。

吉沢 それで、このハノイの政策を考える場合、ただ単に南ベトナムまでの問題じゃなくて、ほぼ同時期に革命に成功したカンボジア、ラオスといった、インドシナ全体へのハノイの影響力を見逃してはならないと思うんですね。その点で、最近のカンボジアで、シアヌーク殿下の動きですがこれについて中島さん、どういうふうにご覧になりますか。

中嶋 そうですね、シアヌークの取り巻きの人たちがプノンペンに帰らずにパリに亡命するというような事件もありまして、もう明らかにシアヌークは力を失っているということは完全に露見しているような気がします。はたしてわたくしはシアヌークが今後プノンペンにほんとは帰るのかという疑問さえあるぐらいですね。

ただ、いわゆるクメール・ルージュはいったいどうなのか。従来キュー・サム

ファンを中心として、クメール・ルージュは中国路線だという見方が非常に強かったと思います。ところが、この夏シアヌーク殿下の帰還を受け入れる前に、クメール・ルージュはいわば内閣改造みたいなことが行なわれたわけで、グエンサリーなどが入閣したりして、状況がまたずいぶん変わってきたんじゃないかという気がするんですね。

吉沢 グエンサリーがかってシアヌーク殿下の目付け役としてクメール・ルージュの中枢部から派遣された。しかも、クメール・ルージュの中ではハノイで鍛えられたチャキチャキのハノイ派である。ということは、非常にソ連のくいだみが、進んでるんじゃないか。

といいますのは、外交問題でかってシアヌーク殿下は自分が外交代表であるというふうなことを言っていたんですが、いざ帰って見ますと、グエンサリー副首相が外交担当の副首相として重要なところに全部出ているということから見ても、やはりプノンペンの政権の中でもソ連派、ハノイ派がかなり有力になってきているんじゃないかと思えますね。

中嶋 ラオスの場合、わたくしこの間タイまで行きまして、ラオスには入らなかったんですが、とにかくビエンチャンあたりから帰ってきた人の話によると、もうあちこちにソ連人があふれているというぐらいで、メコン川の哨戒艇はみんなソ連の船であるとかで、非常にソ連が

入ってるわけですね。

吉沢 政治的に言っても、ラオスを今支配しているパト・ラオの中での人民革命党ですか、これまた非常にハノイとの関係の強いところであるということがいわれてますし、このところ人民革命党が表面に出てくる度合いが非常に強くなりましたですね。

中嶋 そうですね。ですからわたくしその点でいわばインドシナ革命という全体をくくれば、インドシナ革命をめぐる中ソの対立、当面となくソ連の影が非常に強い。このことは中国のアジア政策全般にとっても非常に大きな脅威になる。中国の反覇権抗争は中国としてもますますそれに力を入れざるを得ない状況が出てくるような気がしますね。

吉沢 なるほど。この間ビルマのネ・ウイン大統領が訪中をして、共同コミニケに「いかなる国の、いかなる地域での覇権にも反対する」という例の覇権条項を認めただけですが、そのほか、サイゴン陥落以後、フィリピンと中国とが国交を回復する、あるいはタイと中国が国交を回復するというところで、何か表面的には東南アジアに中国の影が強く出てきたという感じはあったんですが、実は必ずしもそうではない。ソ連もそうだった表面だった特典はほとんどしていないにしろ、底流的には非常に関心を持って、強い力を注ぎ込んでいるんじゃないかというふうにいわれているんですが……。

中嶋 今ご指摘のようにたとえればフィリピンにしても、従来からマルコス政権は中ソ同時国交を言っていて、たまたま中国のほうが早くまりましたが、それ以前から、実はソ連のほうが先に進んでたわけですね。それでああいうインドシナ半島の解放というような事態の前で、急ぎょ中国の影と対応せざるを得ないという選択をしたんですが、全般的にはやはりソ連の影響も無視できないという状況があったような気がします。

それから、マレーシアはむしろラザクさんは今非常に困ってるわけで、国内でゲリラ活動が非常に激化している。それでマレーシアの人口の大半を占める華僑は、もしもこんなにゲリラ活動が激化するならば、いわゆる人種問題が再び噴き出すのではないかと。というのは、マラヤ共産党はだいたい幻の共産党書記長といわれたチン・ベイ以下、中国人が多いわけですね。そういうことに結びつけられるのではないかと。つまりマレー化政策で痛めつけられている華人の側にとっては、その点からの脅威が逆であり、そしてそれがラザクさんに対する批判と結びついて、中国と国交したが何にも問題は解決してないじゃないか。例の約束はどうしたというようなことを言うわけです。それ中国側からしますと、それは政府と政府の関係と党と党の関係は違うんだと、そういうことを言ってるわけですね。

タイは、中国との国交をしたんです

が、その目的は何といってもベトナムとの国交にあったと思うんです。ベトナムの脅威があればこそ、今までのアメリカ寄りであったタイというイメージを払拭するために、まず中国に接近したわけですが、このことが逆にハノイのバンコックに対する冷たい態度を誘っているんじゃないか。その国交もうまくいってませんわね。そういうふう非常に複雑でして、わたくしは当面中国は東南アジアの共産勢力に対するバーバルな支援、声の支援をすると思うんです。それはなぜするかというと、やはりハノイの影響力に対する競争、そしてその背景にあるソ連に対する競争という意味があると思うんです。

吉沢 非常に解放後のハノイの声といえますか、力といえますか、これはあれだけのアメリカ軍の置いていった武器を持ち、それでとにかく戦いに勝った軍事も伴ってるわけですね。その軍事力が直接国境を飛び出して出ないにしても、非常に潜在的な力としては周辺諸国に脅威を抱かせるに足るに十分である。とくに一部で報道されてるように、マラヤの共産党ゲリラとか、あるいはフィリピンの新人民軍に、アメリカ軍から分捕ったライフルを大量に運び込んでるとい話があったり、そういう意味では潜在的に何かを起こす力を持つ勢力というふうに受け取られているんでしょうね。

中嶋 そうですね。たとえばタイなん

かも、いわばタイ共産党はタイ人民、タイ革命のころですか。いわば中国の影響下にあると見られてたんですけど、必ずしもすべてがそうではなくて、東部タイあたりはハノイの影響に入りつつあるんだということを現地の人たちは言ってますけどね。

吉沢 それの証拠に中国とタイが国交を結んでゲリラが少しおさまるかと思ったら、必ずしもそうじゃない。しかもパテト・ラオが陰に陽にタイ軍に対して挑発行動を行なって、メコン川を挟んでの銃撃戦がこのところ絶えないですね。やはりそういうことがタイにおいてはクワリット政権、あるいはマレーシアにおいてはラザク政権の内政がらみでの外交の失敗ということを下の方から印象づけていく、ハノイの一つの播きぶり戦法ではないかというふうな気もするんです。

中嶋 つまり東南アジアはひとえにハノイがどう出るかということにかかっていると言っているくらいですね。わたくしはやっぱりハノイの出方に注目しなければいけないと思いますね。ただ、ハノイは意外に賢明なので、そう単純な革命の輸出などはしないだろうと思えますが、潜在的な脅威は非常に強いんじゃないでしょうか。

吉沢 そういうことですね。それに對してアメリカが、もうとくに東南アジアの地域では、決して積極的な防衛体制には参加しようとしていない。むしろ東南

アジアはもう中立のままでもいいから、あまりさわりたくないという状況にあるわけなんです、その中でいちばんアメリカ寄りといわれているインドネシアなんかいかがでした？

中嶋 インドネシアは意外に落ち着いて、シンガポールとインドネシアはむしろ最後までマレー半島なりインドシナ半島の状況をもう少したかをくくって見ていたと、むしろインドネシア、シンガポールの方向は、太平洋地域、オーストラリア、ニュージーランドを含む方向に関心があるような気がしていますね。その点はやっぱり同じASEAN諸国の中でも違うんじゃないかという気がいたします。

吉沢 そうしますと今後のインドシナを含んだ東南アジアの情勢をじっくりにして考えてみますと、統一ベトナムがほぼ既定の事実として動き出すと、まずまずそれをめぐっての中ソの対立、そして各国がその中で独自路線を何とかやっていこうという各国政権の苦しいやり方という、非常に複雑な動き方をするということになりそうですよね。

中嶋 そうですね。アジアにおけるグローバルな国際政治は一応ベトナム戦争で一段落ついたんですが、これからリジョナブルな国際政治が非常に複雑になるんじゃないでしょうか。

(十一月二十四日放送より収録)

